

付論 近世における「高瀬」の側面と出土陶磁器

—確認調査の結果から—

蜷 父 雅 史

1. はじめに
2. 高瀬町について
3. 近世礎石建物跡の一例
4. 高瀬の近世陶磁器
 - (1) 陶磁器の出土遺跡
 - (2) 陶磁器の器種と分類
 - (3) 「染付VOC芙蓉手文皿」について
5. おわりに

1. はじめに

玉名市では近年、都市計画に伴う道路などの開発が進み、確認調査の事例も増加している状況にある。今回、論題とする高瀬地区も例外ではなく、市道の拡幅や店舗の新築工事に伴い、「高瀬本町通遺跡」や「高瀬御茶屋跡」などの近世遺跡における調査で陶磁器の資料を得ることができた。

高瀬は、近世において肥後五ヶ町に数えられ、県内でも重要な貿易拠点として栄えた港町である。この高瀬から出土する近世陶磁器は、時代背景と共に意義深いものであると考える。

そこで、陶磁器を中心に出土遺物の分類を行い、時期特定などにつながる要点を整理したうえで、その流通状況を概観する。また、高瀬町の確認調査によって、近世の建物跡を検出したのでその例を報告し、ここで併せて近世における高瀬町を考察したい。

2. 高瀬町について

高瀬は、もともと菊池川と繁根木川に挟まれた中洲（砂嘴）であり、浅瀬で当初は「高洲」と呼ばれ、その後「高瀬」という地名がついたとされている（『肥後国誌』）。中世において、菊池一族の系統を引く高瀬氏が出現し、ここに保田木城（別称：高瀬城）を築き、次第に町並みが形成されていった。中世の頃から、高瀬に津（湊）が置かれ、韓半島や中国・明などの海外貿易港として発展し、多量の青磁などが輸入されている。現在でも、湊跡の川床からは12世紀以降の青・白磁の破片が採集される。^{（注1）} 菊池氏が、菊池川下流の高瀬に着眼したのは、何よりも菊池川を支配し、なお有明海を介する対外貿易を目的とするためだったと考えられている。

近世において高瀬は、肥後藩主・細川重賢の藩政改革により、「肥後五ヶ町」（熊本・川尻・高橋・八代・高瀬）の特別行政区として独立し奉行所が置かれ、高瀬町は大きく上・中・下の三丁（本町・

下町・八日町)に分割された。＜注2

湊は国内移出の拠点へと変化し、大坂へと肥後米（いわゆる高瀬米）を輸送するために「御蔵」や「舟着場・俵転がし」といった付属施設が造営され最盛期を迎える。菊池川水運は“高瀬下り”とも呼ばれ、高瀬は、県北の穀倉地帯を代表する集積地となった。菊池川に併行して開削された「裏川」が町並みを流れ、そこに架かる多くの石橋などによって様々な物資が運搬され、玄関口として「高瀬目鏡橋」（県指定重文）が架設されている。また、三池往還筋でもあり、人と物が往来する商都が形成されていた。

しかし、高瀬は、明治10年の西南戦争で戦火にあい、2月27日の昼に横町を除く大半が焼失している。薩軍は熊本の高瀬まで北上し、ここで南下してきた官軍と対戦、西郷小兵衛（一番隊小隊長）が戦死するなど多くの死傷者が出た。そして官軍側の放火により、火の手は高瀬町に及び商家や民家をはじめ、肥後藩にとっても重要な施設であった高瀬御茶屋や御蔵などもすべて焼失した。＜注3

熊本県立図書館所蔵の史料に『事変西南之役』があり、当時の高瀬の火災状況が詳細に記録されている。それによれば、高瀬の家屋188戸が焼失したとされ、今回の確認調査においては、高瀬の3地点において西南戦争時のものと考えられる焼土層が確認されている（本編参照）。

西南戦争後、藩直営の施設を失い、また鉄道開通などによって県北最大の集積港としての機能は廃れていった。しかし、今なお残る高瀬の商家や町屋は戦火を逃れ、増改築を経ながらも以後約130年の時間を越えて商店街を形成している。

ここで、本題に入る前に近世当時の高瀬町の人口をあげておきたい。町奉行であった高瀬寿平が記した「大万帳」（弘化5～嘉永元年）によると当時の人口は次のようにある。

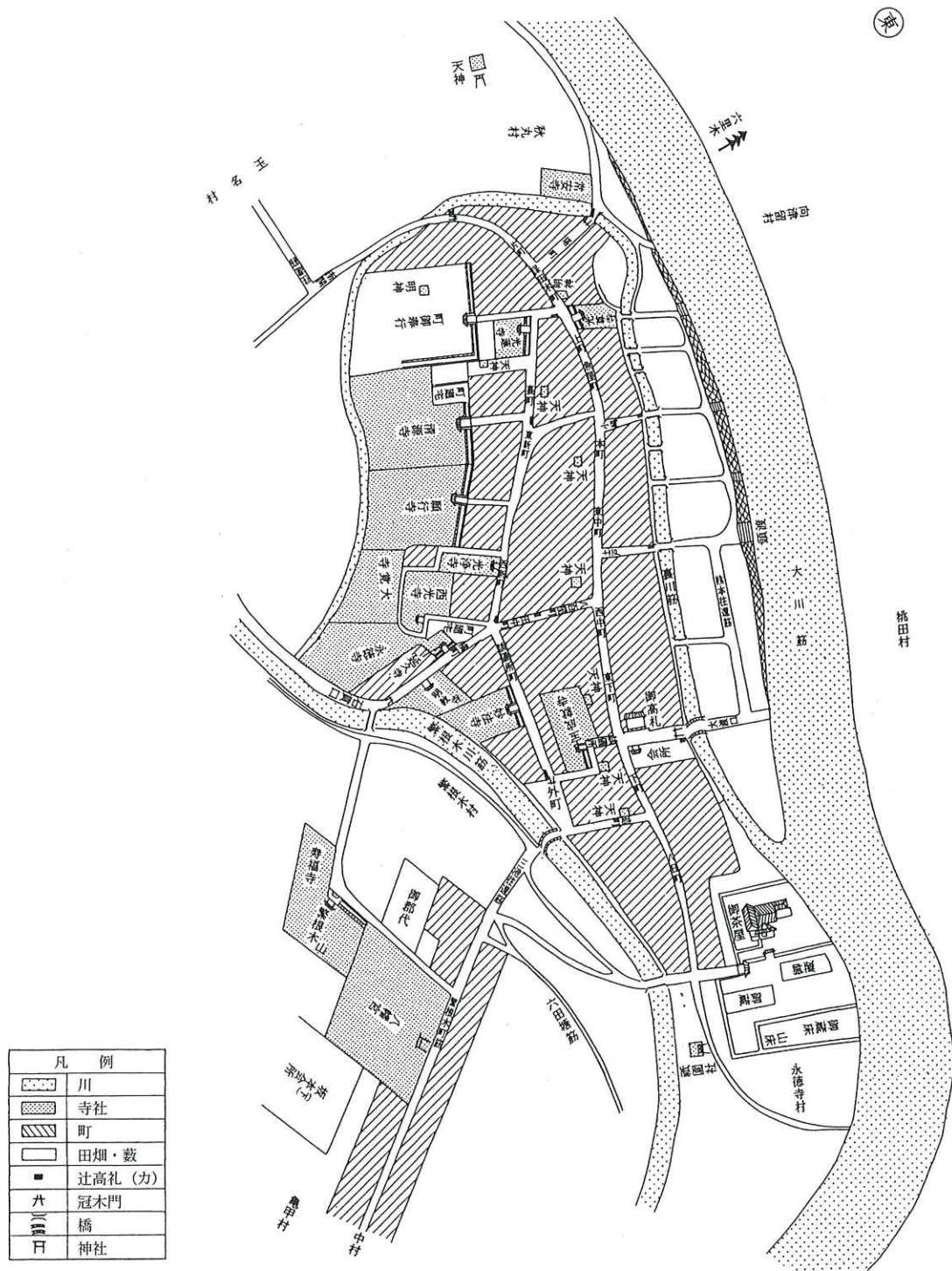
	人口（人）
町 人	1 5 3 9
職 人	5 6 9
役 人	3 7 0
僧 侶	6 7
合 計	2 5 4 5

第1表 近世(幕末)における高瀬の人口（1848年当時）

この記録によると約2600人が高瀬に居住していたことになる。ちなみに明治時代（西南戦争前）の高瀬の人口は2897人（明治8年「御間合二付御届」より）で、維新後に約300人増加している。

なお、現在の玉名市の人口は、約45000人で、そのうち高瀬地区に限ると約680人であり（玉名市役所統計）、江戸時代に比べかなり減少していることになる。

※注 近世において菊池川は「高瀬川」と呼ばれていたが、本稿では菊池川で統一することにする。



第1図 近世における『高瀬町図』 <嘉永7(1854)年>

(『玉名市史／資料篇1(地図・絵図)』より転載)

3. 近世建物跡の一例

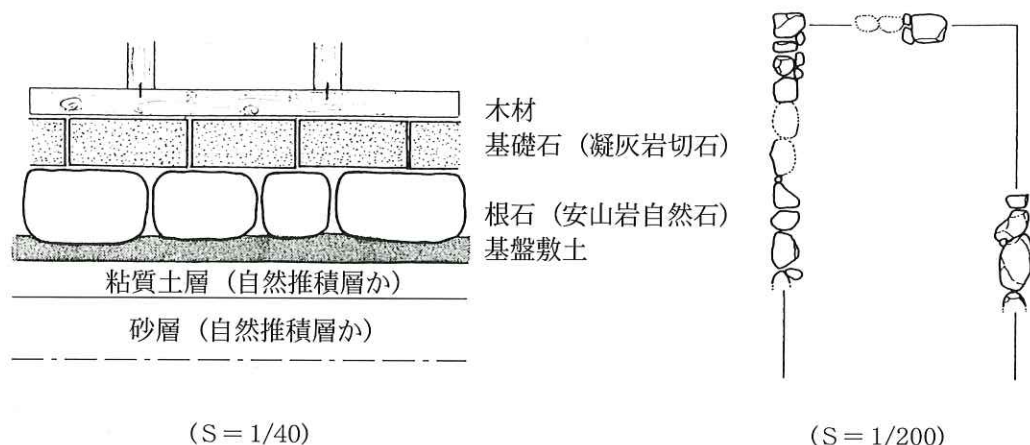
平成14年度に調査した高瀬本町通遺跡から近世の建物跡と思われる礎石が出土した。当初、確認調査によるトレンチで4個の礎石を検出するのみであったが、その後の慎重工事の過程で新たに礎石が出土して急遽、立会調査を行った。その結果、総合して17個の礎石を検出し、ほぼ間口を特定

できる建物一棟分を確認することができた。掘削していない部分も石列は、残っていると思われる。

土層を観察すると、礎石の下層は川の洪水によると考えられる灰褐色の粘土層と川砂による堆積層であり地盤は緩い。高瀬は、前に述べたように砂嘴であり、川の氾濫の度に砂が堆積している可能性があり、以前の中世・高瀬町の生活面からは約3～4m上面が現在の生活面とみられているのである。

礎石の構造をみると、まず粘質で締りの強い黄褐色粘土（おそらく周辺のローム土）を敷き、人為的に基盤の代わりとして固められている。近世の土木工事などでは地盤が緩いとき、土台木や梯子土台などの技法が用いられることがあるが、高瀬においては「裏川」の石垣で止杭と土台木の使用が認められている。^{<注4>}

この敷土の上に約40～80cm四方の安山岩自然石が天端を揃えて設置され、その直上に凝灰岩切石（約40cm四方）が並んでいた。



第2図 高瀬における近世礎石建物の模式図と平面図

今回、検出した礎石建物は、間口の寸法が礎石中心で約6mあり、「3間」であったと判断でき、奥行も5間程までは確認した。近世において高瀬の場合、各戸の規模は間口3間未満が約半数で平均的とされ、本通り・上町で8間が数件、本町・中町で4～5間、下町から八日町にかけては3間が多かったといわれている。^{<注5>} 今回の調査は、下町でありそれを裏付けの一例となる。また、高瀬は敷地自体も間口が狭く、奥行が長いのが特徴だが、他都市の町屋よりも長いといわれ、狭いため隣家と壁を共有する共壁が用いられた。礎石も隣家と共有する形であったのかもしれない。

県内において、城郭を除き近世建物の完全な発掘はほとんど行われていないに等しいが、参考に類例を挙げれば、長崎県の出島和蘭商館跡の発掘調査において、間口3間×奥行5間の礎石建物（一番蔵跡）の出土例がある。^{<注6>} 今後、近世における町屋との比較、及び高瀬の他地点におけるデータを蓄積し、町並みなどを文献史料と共に検証していくことが課題と考える。

（※補記）平成15年度における高瀬下町の確認調査でも、一軒の礎石建物跡を確認した。同じように

焼土層下に安山岩の礎石列が東西方向で検出できた。

4. 高瀬の近世陶磁器

(1) 陶磁器の出土遺跡

これから本稿で紹介する陶磁器が出土した遺跡について、具体的な概要を述べたい。主に平成13～14年度にかけて行った確認調査地であり、調査内容についての詳細は本編で述べているので省略する。（調査地点については第4図参照）

①高瀬町奉行所跡

高瀬には、肥後五ヶ町として町奉行が置かれ、明治2年に廃止されるまで同地にあった。町奉行とは町の政治責任者であり、高瀬の場合、藩庁の町局に属する二百石高の平士一人が任じられていた。^{<注7>} 高瀬目鏡橋の架設に関わった高瀬寿平もその一人で、後に宮内省の天皇侍講となった元田永孚が町奉行の最後を務めている。

県の遺跡地図では「保田木城跡」と同じ範囲で、同一の複合遺跡として扱ってある地点である。確かに保田木城跡の一角に、近世になって奉行所が置かれたが、保田木城跡は中世の遺跡であるから、近世陶磁器は出土しない。基本的に中世の遺構を切って、近世の建物跡及び、陶磁器が出土するので、本稿では遺跡名を「高瀬町奉行所跡」で統一する。ちなみにこれまで本格的な発掘調査が行われていないので、奉行所跡などの具体的な遺構は未確認である。また、同じ遺跡範囲内で奉行所の南には「光蓮寺」という寺院が近世に建立されている。現在はないが、この跡地にあたる所を調査することができ、多量の近世陶磁器を採集した。

②高瀬本町通遺跡

現在の国道208号線より北側に延びる中町商店街を中心に広がる遺跡で、江戸時代に形成された町並みが今も色濃く残っている。しかし、本来は中世の高瀬町を含めた意味での複合遺跡である。

以前、下水道工事の際に多くの中世遺物（瓦器・青磁・漆器・中国貨銭など）の出土例がある。^{<注8>}

近世になって、現在のように表通りと裏川の間に沿って商家が建ち並ぶ景観となった。西南戦争での被害も本町は比較的少なかったため、当時の商家が最もよく残っている。今回、一部の近世礎石建物跡を確認している。

③長福寺跡

八日町に建立された中世寺院跡であり、大野氏が造営したともいわれる。^{<注1>} 中世の高瀬において、貿易の実務にあたったのは禅宗などの僧侶であり、早くから各宗派の寺院が数多く建てられた。その代表が宝成就寺であり、周辺は門前町の様相を呈していた。この長福寺はその後、保田木に位置を変えたともいわれ詳細なことは不明な点が多い。確認調査では、寺院に伴う直接的な遺構は検出できなかったものの、その後の近世～近代にかけての建物跡、西南戦争時の焼土層、そして陶磁器が出土した。今後、長福寺跡の明確な位置やその範囲の特定が課題である。

④高瀬御茶屋・御蔵跡

高瀬御茶屋は、細川藩主の巡検時の休泊施設であり、現在のJR鉄橋北側の永徳寺に造営された。

明治10年の西南戦争で焼失し、今は当時の井戸が2ヶ所残るのみである。永青文庫所蔵の史料に『高瀬御茶屋絵図』があり、御広間・御居間など江戸中期とされる詳細な平面構造が記録されている。

高瀬御蔵は、全国の米が大坂の堂島に集められ、米経済が成立するに至り、肥後藩直営の年貢米御蔵として造営されたものである。各藩は、米相場を見計らい輸送するようになるが、肥後藩は村方を通じて年貢を集めるという効率的な方法に変え、最大の穀倉地帯であった菊池川水系の年貢は、藩直営の大小4棟の高瀬御蔵（25万俵収容可能）に収められることとなった。実際に、大坂への輸送で肥後藩からの40万俵という量は全国一で、その中でも高瀬からは約半分が積み出されていた。^{<注9>}

御蔵は、西南戦争により焼失しているが、薩軍がこれを奪取しようと迫ったため、官軍により火が放たれたといわれている。跡地には石垣と礎石のみが残存し、以前に御米山床の一部である石積みの発掘調査例がある。^{<注4>}

（2）陶磁器の器種と分類

ここで掲げる「陶磁器」とは、基本的に本編の実測図と対応するものであり、出土地や出土状況などは前で報告しているので省略し、総合的に「高瀬町出土」として一括して考えたい。

また、本編に掲載している陶磁器が調査で採集したすべてではない。遺物台帳作成における分類で、特に小片や特徴の少ないもの、他と類似するものなどは除外した。そのため、以下の分類・考察などの文中に、実測図が掲載されていないものの事項も含んでいる。

a. 陶器について

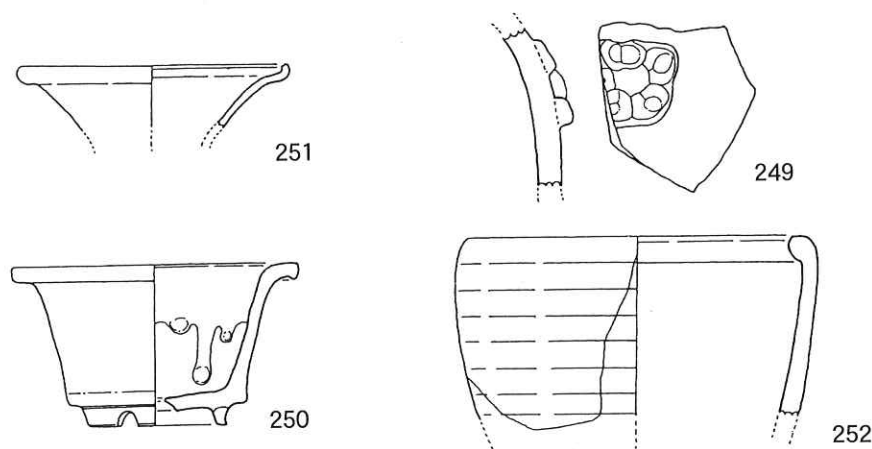
今回、高瀬における確認調査で出土した陶器を器種別に分類すると「碗・皿・鉢・壺・瓶・摺鉢・徳利・香炉・灯明具・植木鉢・水盤・土瓶・仏花器」などがある。これらの産地としての分類は、肥前の有田産の他に、唐津産、福岡産、そして地元の熊本産の陶器があった。具体的には、肥前の場合、波佐見系、嬉野系、内野山系、唐津の弓野窯系のものがあり、福岡は高田町の二川焼、大分日田の小鹿田焼、熊本は南関の小代焼と八代の高田焼の陶片が含まれていた。他に小片が多く、産地の特定が困難なものがあったが、陶器の場合、唐津系のものが多数含まれているようである。実測していないが、絵唐津葦文壺片と思われるものもあった。また、備前や萩など遠方産の特筆すべき陶器は、今回確認できなかった。

装飾技法からみると、鉄絵、二彩、刷毛目、白化粧、象嵌、陶胎染付などで表現されたものがあり、釉薬には透明釉と無釉の他に緑釉・鉛釉・鉄釉・藁灰釉・木灰釉があり、それらを地掛釉、上掛釉として二重掛けを施して仕上げたものがある。

なお、熊本の小代焼については、坂本重義氏の御教示により、南関の瀬上窯・瓶焼窯で江戸後期～幕末にかけて生産されたものを数点確認した。その器種は、甕・土瓶・仏花器・植木鉢・香炉で特に瓶焼窯の特徴である「飛鉋技法」が施されたものがある。^{<注10>} 小代焼は、高瀬でも庶民に親しまれていたと思われるが、いつ頃から流通しているのかを明確にするのが今後の課題である。

瀬上窯は1836(天保7)年、他国産の陶磁器流入に対抗しようとする藩の方針によって始められた殖産窯である。今回、瀬上窯の江戸末期のものが主であったが、そのような背景のもとに多く流通

していたとも考えられる。



第3図 高瀬出土の小代焼（瀬上窯産）（S=1/3）

八代の高田焼は茶器が多いとされるが、出土したのは小皿で、見込み内に白色を呈した円と桜文の象嵌が施されており三島唐津の象嵌とは異なるものである。八代焼は、上野喜蔵を祖とし、次男・徳兵衛が松尾焼を起し、その子・太郎助が第3家として象嵌手法を完成させたといわれ、当資料は、松尾焼の系統を引くものと思われる。八代も高瀬と同じ肥後五ヶ町の一つであり、それら陶磁器の流路は当然あったはずである。

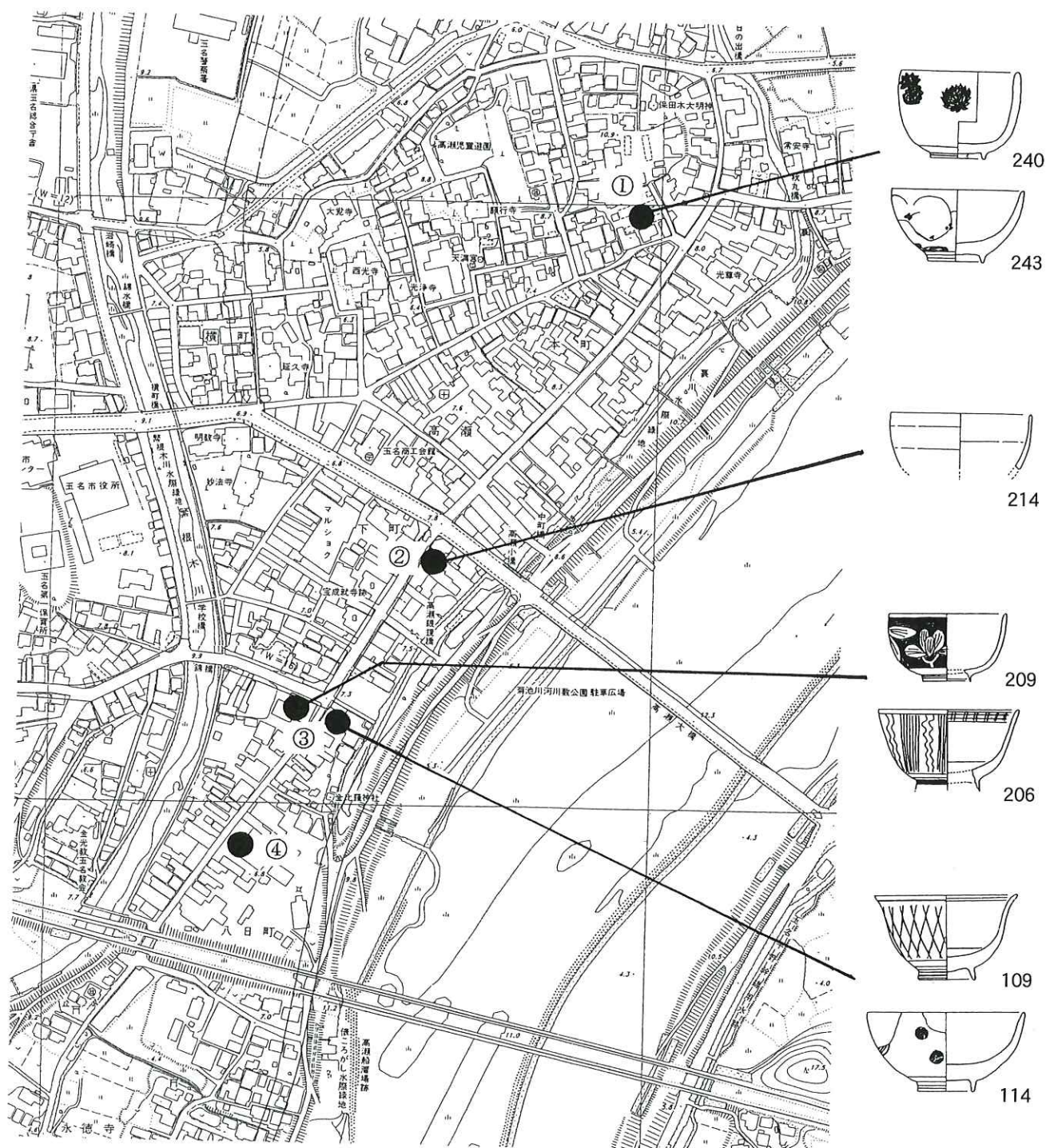
また、特筆すべきは肥前産の皿片で、初期の焼成技法の特徴である砂目痕が確実に見込み内に残るものを1点確認できたことである。おそらく1610～1630年代に生産されたもので今回、高瀬において最も古い近世の陶器資料となる。

高瀬は、中世より海外貿易港として栄え、港町また門前町としての様相をもっていた。よって、今後の調査により海外産（タイ・ベトナムなど東南アジア系）の陶器が出土する可能性もあると考えている。

b. 磁器について

出土した磁器を器種別に分類すると「碗・皿・盃・角鉢・猪口・壺・甕・瓶・銚子・段重・茶入れ・徳利・仏飯器」などがある。陶器と同様に、トレンチ調査でありながら、総括すると近世当時の庶民の日常生活に伴う一式の器種が揃っている。それらの器種をさらに細分すると「碗」の中では、丸碗・平碗・端反碗・広東型碗・筒型碗（湯呑）・飯碗に分類される。また「皿」は、大皿・小皿・手塩皿・輪花皿・紅皿に分類できる。

これらの磁器の産地は、肥前の有田・嬉野・波佐見などがあり、中でも窯跡の発掘調査が行われている小樽窯・広瀬向窯・樋口窯など18世紀前半以降の遺物と類似するものが含まれる。銘款のある染付磁器としては、皿・碗・蓋の3点があり、それぞれ高台内に「富貴長春」・「太清壬子年製」・「壺」とあり、いずれも18～19世紀の特徴を備えている。「富貴長春」銘は十字ではなく二行に配したもので、明末～清の磁器から写したと推測されているものである。特に「太清壬子年製」銘



第4図 高瀬の調査地点と出土した近世磁器碗 (地図 S = 1/5,000)

	遺跡名 (調査地)
①	高瀬町奉行所跡
②	高瀬本町通遺跡
③	長福寺跡
④	高瀬御茶屋跡

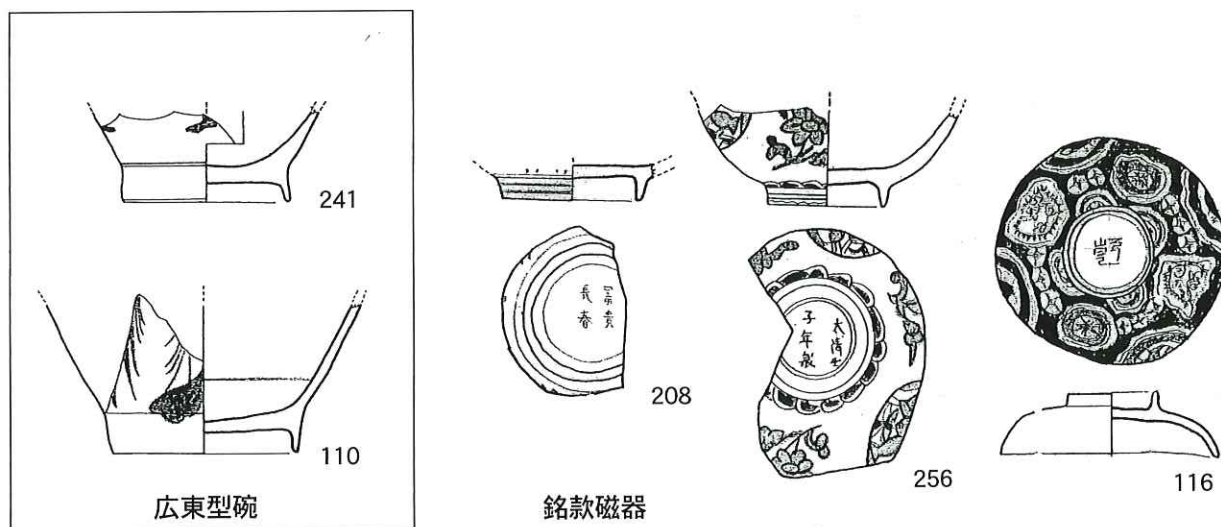
は、中国の国号と年号を転用したもので、通常は“太明成化”など、明代のものが多いが、これは清朝の影響をうけた19世紀の所産と思われる。他の類例として、「大清雍正年製」銘などが確認されている。「豈」銘は、有田の樋口窯などにみられ1780～1860年代に製造されているものに類似している。^(注11)

なお、染付以外の色絵は今回、確認できなかったが、染付と色絵が混合した磁器の皿片は1点のみ出土している。これは、後世の重ね塗りの可能性もあり、確実とはいえない。

製作技法からみると、見込み内に蛇目釉剥ぎのあるものが碗と皿で3点、また蛇目凹型高台の皿が2点あった。コンニャク印判による染付は、18世紀前半の碗が1点あり、菊花文（団鶴文か）など2パターンの文様が確認できる。18世紀に流行したとされる見込み内に五弁花文様を施す碗があったが、文様の形がかなり崩れ簡略化されたものなので、18世紀後半の所産であろう。その他、明治の型紙刷印判の染付が、皿、筒型碗、段重の3点が含まれていた。

碗の形態からみると、1780年代頃から主流となる広東型碗が2点あり、その時期と共存するとされている筒型碗も揃って確認できる。他に蓋付碗や、そば猪口なども出土したが、それらの器種は庶民の経済力の向上が背景にあるといわれているものである。^(注12)

なお、高瀬御茶屋跡において、染付の「茶入れ」が出土した。茶道具の一部なのか分からないが御茶屋との関連性など検討を要する。



第5図 高瀬出土の近世磁器 (S=1/3)

肥前産の磁器が大半を占めているが、中でも波佐見焼であるいわゆる「くらわんか」が碗と皿に多くみられ、最も庶民に親しまれた磁器として高瀬町にも普及していたようである。なお、磁器の年代は、全体的に大橋編年（1989）のIV期～V期に属し、18世紀前半以降に相当ものが主流であった。それよりも確実に先行するといえるものは今回、確認できなかった。IV期は、全国的に肥前磁器の出土例が増加する時期であり、食器における需要が増大し、機能別に器種が多様化するといわれている。^(注12) 以上のような結果から、高瀬もその傾向が窺える。高瀬近辺の遺跡では、寿福寺跡や玉東町の世尊寺跡の調査例があり、高瀬とほぼ同時期の肥前磁器の流通状況が知れる。

(3) 「染付VOC銘芙蓉手鳳凰文皿」について

平成15年3月に行った高瀬字保田木の「高瀬町奉行所跡」における確認調査において、染付のVOC銘芙蓉手文皿（以下、VOC皿）と判断される破片が出土した。また、菊池川の近世港・高瀬船着場跡付近で以前、玉名市の松本秀蔵氏により採集されていた同類のVOC皿破片をここで併せて参考資料として紹介したい。

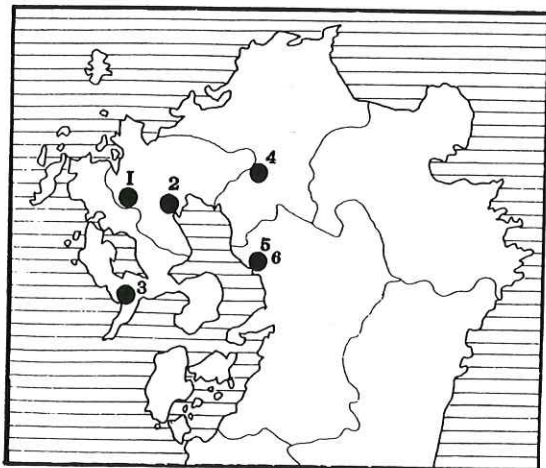
a. 「VOC銘芙蓉手鳳凰文皿」の概要

まず、この皿について概要を述べたい。「VOC」とは、「Verenigde Oost-Indische Compagnie：オランダ連合東インド会社」の略名で、1650年以降から有田焼を伊万里港から世界に輸出していた貿易会社の名称である。VOCは当初、中国の景德鎮窯などの磁器を代表としてアジア各国に輸出していたが、中国国内の戦乱により廃れ、それに変わる磁器として「有田焼」がその対象となった。

当時、日本は鎖国政策下にあったが、出島を通してのオランダと中国以外との貿易は行われていなかったため、VOCは独占的に大量の磁器を発注し、ヨーロッパなどに輸出した。また、有田焼の生産も向上し、いわゆる「伊万里」として名声をあげた。このような背景の中で、VOCが有田の窯元へ自社マークを入れ生産させた特注品がこの皿である。この皿は主に、有田町の谷窯・稗古場窯において製作されていたことがわかっている。皿の大きさは4種類に大別でき、全体的に大皿の類に入るが、直径が40cmを超えるものは少ない。また、皿としてはやや深く、文様は芙蓉手という割付の図柄が施され、二羽の鳳凰、窓絵は6分割されて牡丹と竹梅文が交互に描かれ、中央に「VOC」の社名を重ね合わせたマークが入る。^(注13)

b. 他遺跡における出土例

この「VOC」銘入りの芙蓉手文皿は、その会社名を売出すため、主に輸出用として海外に運ばれたものであり、現在でもドイツなどヨーロッパ各地に残されているものがある。しかし、生産地は日本（佐賀県有田町）であり、実際に製作されていた窯跡からその陶片が出土している他、国内において数箇所によりこの皿が出土している。



	遺 跡 名	所在地	出土遺構など
1	稗古場窯跡	佐賀県有田町	※生産地
2	笹谷遺跡	〃 塩田町	藩役所跡(遺構外出土)
3	出島和蘭商館跡	長崎県長崎市	商館員食器として多量出土
4	久留米城下町遺跡	福岡県久留米市	廃棄土坑より出土
5	高瀬町奉行所跡	熊本県玉名市	遺構外出土
6	高瀬船着場跡対岸	〃	表採資料

第6図 国内における「VOC皿」出土地

生産地と同じ佐賀県内の笹谷遺跡は藩の役所跡とされ、ここから遺構に伴わず、径 30 cm の皿（約 1/3 残存）が出土している。なお、これには高台内にハリ支え痕がある。

長崎県の出島和蘭商館跡からは、発掘調査によって最も多く出土している。当時、出島は VOC の貿易拠点地でもあり、出土量や出土状況からも、出島商館員たちの日常食器として利用されていたと考えられている。^{註6} 福岡県の久留米城下町遺跡では、近世（享保～文政年間）の火災に伴う廃棄土坑から焼土や他の陶磁器と共伴して出土している。^{註14} 径 21 cm（約 1/2 残存）で、これも高台内にハリ支え痕がある。

そして、今回確認した熊本の高瀬町奉行所跡を含めて、以上が、現在確認できた国内における出土地である。主に生産地（佐賀）と、貿易地（長崎）を中心にした九州の範囲内に限られ、当時、国内における消費の拠点であった江戸（東京）・大坂（大阪）においても出土例はないという。^{註14}

また、注目したいのが九州における出土地をみても、通常の近世遺跡（庶民集落）よりは、藩の官衙的施設などからの出土例が多いことである。

出島は、実際に貿易拠点であるので出土する理由は考えられるとして、佐賀の藩役所跡や高瀬の町奉行所跡、及び久留米城下町など藩の役人が勤務あるいは居住する地点からの出土例が多い。やはり「くらわんか」のように庶民的に流通した皿ではないことが窺われる。生産地である有田から粗悪品などが数点出回り、藩を通して極一部の中で使用され、破損すれば通常のように廃棄されていたようである。本来、輸出用であるため、国内では流通していないし、特別珍重というわけでもなかったであろう。ただ、それが VOC の皿としてどれだけ認識されていたかは疑問である。

c. 高瀬における出土品

①高瀬町奉行所跡資料（第7図-①）

平成 14 年の確認調査によって、トレンチ内から出土したものである。調査敷地に対するトレンチ数とその面積の割合には多量の近世陶磁器が出土した。

これは、口縁部の破片であるが、おそらく全面発掘すれば他の接合部位があったものと思われる。復元口径は 32 cm で、口縁の窓絵には芙蓉手文の一部である牡丹と、見込みに鳳凰の尾先が一部確認できる。この図柄の配置構成は、破片ながら「染付芙蓉手鳳凰文皿」であると考えられる。しかし、中央の「VOC」マークまでは残存していないため、断定はできないが、別タイプとして VOC 銘が入らない芙蓉手文皿もある。他の染付磁器をみても、文様構成としての芙蓉手文は多種類あるが、この種の図柄は、他にみられない。全体的な呉須発色の濃淡具合に対しての口縁端部のだみの濃さ、見込み段下の円の空白部、透明釉の貫入、皿の断面をみても VOC 皿の特徴と近似する。

しかし、出島から出土している資料の中で、図柄構成は同じながら、窓絵の枠線や文様全体に丸みがあり、呉須発色が濃い藍色のタイプ（仮に A 類とする）のものとはやや異なる。これは、呉須発色が薄く、全体の線が細いタイプ（仮に B 類とする）で、久留米城下町遺跡のものと類似している。この差異は、生産窯の違いか、絵付師の違いか判断できないが、A 類のタイプがより緻密なデザインなので輸出用なのかも知れない。いずれにしても、これは輸出されずに国内に残されたものということになる。



第7図 高瀬出土の「VOC皿」片 (S=1/3)

②高瀬船着場跡付近採集品 (参考資料・第7図-②)

この遺物は、菊池川の川床にて玉名市在住の松本秀蔵氏（元・市文化財保護委員）によって採集されたものである。^(注15) 菊池川は従来より、土器などの遺物が採集される川として知られ、縄文土器から弥生・土師器・須恵器・瓦器・青白磁・近世陶磁器など年代も幅広く、実に多くの遺物が採集されており、周辺は「高瀬菊池川河床遺跡」として県遺跡地図にも登記されている。これらは、近年における上流のダム建設や堤防工事、砂取業によって水流に微妙な変化が生じ、川床の埋蔵遺物が出土していると考えられるが、特に青磁は中世からの海外貿易港であった高瀬の湊跡から、国内では最も多く採集されている。近世になると、港は別章で述べたように積出港として発展し、肥後を代表する船着場となった。この皿片は、船着場跡と高瀬目鏡橋の中間にあたる川床で採集されたものであるが、他にも近辺から明や安南の青花（染付）皿、唐津系緑釉碗、天目碗、伊万里系青磁など輸入品を含め近世陶磁器が多量に採集されている地点である。^(注16)

遺物を観察すると、見込み中央部のみの破片で、「VOC」銘が確認できるが、Vの左上とOの字が部分的に欠損している。他に、それを囲む円文と周囲に花卉と葉の一部が確認でき、線が細く、呉須発色の薄いB類で、高瀬町奉行所跡で出土した資料（以下、①資料）と同タイプであると思われる。なお、高台内にハリ支え痕が2ヶ所残り、見込み内には一見、砂目にも見える癒着痕が残っている。①資料に比べ、同じ透明釉であるが貫入はみられない。川床の採集品でありながら、ハリ支え痕などから贗物とは考え難い。

d. 考察

熊本では、肥後五ヶ町の一つである高瀬において、いわゆるVOC皿が2点出土している。この皿片が同一固体である可能性もないわけではないが、出土地点も離れているし確実な接点もないので無理がある。2点の相違点を挙げるならば胎土で、①資料がやや灰褐色を呈し、不純物が混入しているのに対して、②資料は白色で不純物の混入がほとんどない。おそらく陶石の違いと思われるが、それを除いて、この2点は破片ながら呉須色・釉調・文様線の太さなどの特徴が共通する。い

ずれもB類で、久留米城下町遺跡の資料と同類品と考えられる。また、留意点としては出島・笹谷遺跡・久留米城下町遺跡、及び高瀬船着場跡の採集品には、いずれも高台内にハリ支え痕が残っていることである。通常、焼成技法として砂目積みの方が初期（1600～1650）で、ハリ支え技法は17世紀中頃以降からみられるので、砂目痕とハリ支え痕が同時に残ることはない。よって、②資料の見込みに残るものは、砂目痕よりは癒着痕（フリモノ）とみた方が妥当である。以上のようなことから、これらは同じ技法によって製造されたといえる。また、これらが製造された実年代は断定できないが、胎土からして②資料よりも、不純物の多い①資料の方がやや先行するものと考えられる。

なお、この皿は、主に1650～1730年代を中心に生産されているので、その間かあるいは、その後伊万里港から船で陸揚げされたか、佐賀～福岡（久留米）方面に陸伝いで高瀬に出回ったものと想定される。

菊池川の採集品については、例として高瀬湊（港）の川床から青磁が多量に出土する理由を挙げると、貿易船が輸出品として青磁を運搬してきて、途中で割れたものは選別し、港に荷揚げする前に船上から投棄していたためとの見方がある。^{註17} また多くの近世陶磁器が同じ川床から出土するのも、そこに近世に繁栄した船着場があったからといえるのかも知れない。当時の交通手段は、街道を除くと海や川の水運が主流であり、特に高瀬町は多くの物資が港から陸揚げされた。

久留米城下町遺跡出土の皿について、園井正隆氏（久留米市教委）は、「久留米藩は、出島の情報を収集するために、長崎に出張所を設けており、貿易品が久留米藩に流れる窓口があった可能性はある。」と述べている。

このように、高瀬の場合も肥後藩、あるいは高瀬町奉行所を通じて搬入されたものと考えられる。

なお、高瀬には「信牌」という幕府発行の長崎通商照票が残存している。これは、長崎との貿易許可書であり、交易があったのは確実といえる。しかし、問題はいずれの資料も破片であり、全国的に出土例が少ないだけに検討するに少々の危険を伴うので、今後の調査に期待することにしたい。

5. おわりに

高瀬は玉名にとって、歴史的にも重要な位置を占めている。近世遺跡の発掘は、絵図・文献史料と併せた考察が不可欠とされているが、それに準ずる対象データ及び、考古資料の蓄積が必要となる。しかし、まだ高瀬町の数%しか調査しておらず、完全に検証資料が揃っているとはいえないので不明な点が多いのが現実である。

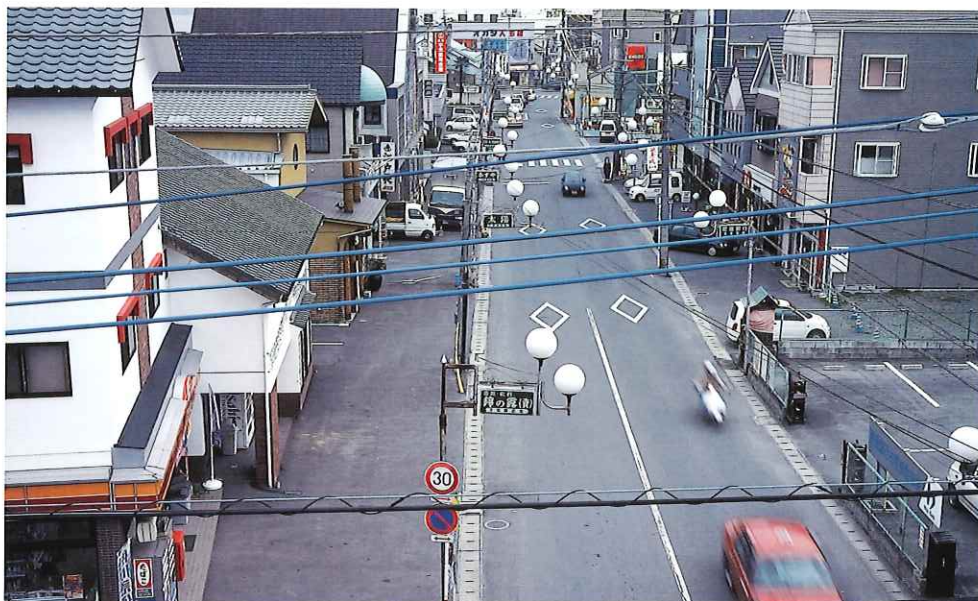
これで高瀬における出土陶磁器の年代幅を提示するのも無理があるが、概観すれば、今回、1610～1630年代（大橋編年Ⅱ－Ⅰ期）を上限として、以降幕末まで流通し、明治の印判磁器が流入するに至っている。全体的に、中世末から近世初頭の様相を追及するに至らなかったことは不十分であり、また、長崎（出島）との交易、関係がどのようなものであったのか、埋蔵文化財の面からは限界があるので今後の課題とし御指導を承りたい。

最後に、出土した小代焼をはじめ各陶磁器について御教示いただいた南関町教育委員会の坂本重義氏、また採集資料を御提供していただき掲載を承諾して下さった松本秀蔵氏と玉名市立歴史博物館の方々に厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 注1 田邊哲夫 「菊池川口の港の変遷について(私案)上」『高瀬湊関係歴史資料調査報告書(一)』1987
- 注2 吉田莊一郎 「軒並系図書における高瀬町南部の町の性格について」同上 1987
- 注3 田邊哲夫 「戦場そして基地高瀬」玉名市立歴史博物館企画展図録 1997
- 注4 西田道彦 「御米山床発掘調査」『高瀬湊関係歴史資料調査報告書(一)』玉名市 1987
 ※補記 肥後五ヶ町の一つ川尻においては、御蔵の建物が一部現存しており参考にできる。
- 注5 北野 隆 「高瀬の町屋」『玉名市史・資料編3 (自然・民俗)』玉名市役所 1993
 秋元一秀 玉名市歴史博物館講演会における崇城大学工学部の発表記録による 2004
- 注6 高田美由紀 『出島和蘭商館跡』復元事業に伴う発掘調査報告書 長崎市教育委員会 2000
- 注7 田添夏喜 「保田木城跡」『玉名の文化財・総集編』玉名市教育委員会 1974
- 注8 田添夏喜 「高瀬本町通り遺跡」『文化財めぐり・82』玉名市史編集委員会 1985
- 注9 田邊哲夫 「菊池川水運・港の歴史」『川と港展』玉名市立歴史博物館企画展図録 1997
- 注10 坂本重義 『小代焼瀬上窯跡・瓶焼窯跡』南関町文化財調査報告書 南関町教育委員会 1995
- 注11 大橋康二 「肥前・有田磁器にみる紀年銘について」『研究報告第89集』国立歴史民俗博物館 2001
- 注12 大橋康二 「近世における肥前陶磁の流通」『研究報告第46集』国立歴史民俗博物館 1992
- 注13 大八木雄二 「稗古場の芙蓉花」『皿山雑話4』
- 注14 園井正隆 「VOC 銘入り染付芙蓉手鳳凰文皿について」『福岡考古』福岡考古懇話会 2002
- 注15 松本秀蔵 「『陶片は語る』を顧りみて」『歴史玉名・第29号』玉名歴史研究会 1997
- 注16 田邊哲夫 「『陶片は語る』展示目録」玉名市立博物館 1996
- 注17 桑原憲彰 「熊本県出土の中国陶磁一覧表」『中国陶磁の美』熊本県立美術館 1980
- 森本一瑞 『肥後国誌』(高瀬町長福寺の項など) 後藤是山編・青潮社 1972
- 田邊哲夫 「菊池川口の港の変遷について(私案)下」『高瀬湊関係歴史資料調査報告書(二)』1988
- 田邊哲夫 『(伝)世尊寺跡』玉東町文化財調査報告第3号 玉東町教育委員会 1995
- 森山恒雄 「高瀬町・高瀬津の研究史」『高瀬湊関係歴史資料調査報告書(二)』1988
- 西田道彦 「高瀬湊の地理的位置」『高瀬湊関係歴史資料調査報告書(一)』玉名市役所 1987
- 門岡 久 「近世(三、高瀬町)」『岱明町地方史』岱明町役場 1969
- 大橋康二 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社 1989
- 大橋康二 「肥前陶磁の変遷図」『古伊万里』大橋康二・西田宏子監修 平凡社 1992
- 佐賀県立九州陶磁文化館編 『九州陶磁の歴史的展開』佐賀県立九州陶磁文化館 1996
- 亀井明德 「熊本県出土の中国陶磁」『中国陶磁の美』熊本県立美術館 1980
- 園井正隆 『久留米城下町遺跡』久留米市文化財調査報告書第169集 久留米市教育委員会 2001
- 吉岡康楊ほか 「近世窯業遺跡データ集成」『研究報告第73集』国立歴史民俗博物館 1997
- 成瀬晃司 「江戸の武家屋敷と町屋の発掘」『考古学がわかる』朝日新聞社 1997
- 梶原慎二 『不動山窯跡群・吉田1号窯跡』嬉野町文化財調査報告8集 嬉野町教育委員会 1998
- 梶原慎二 『嬉野町の古陶磁窯跡』嬉野町文化財調査報告8集 嬉野町教育委員会 1998
- 東中川忠美 『内野山北窯跡』佐賀県文化財調査報告第129集 佐賀県教育委員会 1996

IV 付論



高瀬下町線周辺
(南から)



高瀬本町通遺跡
周辺(北から)



高瀬出土
VOC皿片